

聖書:使徒の働き16章16～40節

説教:主イエスを信じなさい

はじめに

パウロとシラスは、最初の伝道旅行で開拓した教会の人々を励ましたいと考え、二回目の伝道旅行に出かけます。リステラという町に行くと、立派な信者に成長しているテモテを見つけ、彼も一緒に旅行に連れて行くことにします。ここまでまことに順調な旅だったのですが、そこから先に進むとすると、意外なことに聖霊によって止められ、何度も目的地を変更しなければならなくなります。一体どこへ向かえばよいのかと困惑していたとき、パウロは「マケドニアに渡って来て、私たちを助けてください」と訴える幻を見ます。そこで一行はすぐに、いまのギリシャの北にあるマケドニア共和国の大きな町であったピリピに向かいました。そこでリディアという女性に出会い、福音を語ったところ、リディアとその家族が救われ、この人たちがやがてピリピ教会の礎となっていきます。行こうと思っていた道が閉ざされたときは分からなかったけれど、こうして振り返ると、神はなにをさておいても助けを叫び求める者を救おうとされる方だということが見えてくる。それが前回までのあらすじでした。

では、その後のピリピの伝道活動は順調にいったのかというところではない。パウロとシラスの上に思いがけない事件が降りかかります。そこにどんな神のご計画があったのかを見てまいります。

1 試練

1) 占いの霊につかれた女

パウロがピリピの町で伝道の拠点としていたのは、祈りの場と呼ばれる所でした。いつものようにそこへ行こうとすると、どんなわけかはわかりませんが、占いの霊につかれた一人の女性が後をついてきて、周りの人たちに叫びます。「この人たちは、いと高き神のしもべたちで、救いの道をあなたがたに宣べ伝えています。」

聖書では「彼女の主人たち」とありますが、今風に言えばこの女性を食い物にしている「怖いお兄さん」がバックにいる。パウロはそういう女性であることをすぐ見抜きます。下手なことをしたらトラブルになる。それで最初は我慢していた。ところがこんなことが何日も続くので、これではかえって伝道の邪魔になると思い、この女にこう言った。

「イエス・キリストの御名によっておまえに命じる。

この女から出て行け。」すると霊が出て行って静かになったのはいいのですが、案の定、トラブルになってしまいます。

2) 告訴、投獄

主人たちはパウロとシラスを捕らえて、パウロたちが町の風紀を乱して町を混乱させようとしていると訴えます。もちろんこれは外向きの理由で、19節にあるように「金儲けの望みがなくなった」ので、その腹いせにひどい目にあわせようとしてそれらしい理屈を言っているだけです。

訴えを聞いていた長官はどうしたか。裁判にかけません。パウロがしたことでも怒り狂っている人たちの不満を満足させる方向で判断をする。人々のいる前で二人を鞭で打ち、牢獄に閉じ込め、足かせまでかけるように命じました。これで騒ぎは収まります。実はこのときの長官の判断が後で問題になります。

2 ローマ市民権

1) なぜ最初に言わなかったのか?

何が問題であったか。37節で明らかになるのですが、パウロはユダヤ人ではありましたが、生まれながらにローマ市民権を持っていました。ローマ市民権は、今で言えば外交官の身分に匹敵するくらいの権利でしょう。外国を旅行して何か問題が起きてもその国の法律に従う必要はない。ローマ帝国の法の下に守られるようになっている。ですからパウロが町の人々から訴えられたとき、最初から「私はローマ市民権を持っている」と言えば、鞭打ちという非常につらい刑罰を受ける必要もなければ、暗くてきたない牢獄で一晩を過ごすというみじめなことにもならない。それくらいの力を持っていた権利です。ところがなぜかパウロは黙っていた。解放されるときになって、自分はローマ市民であると訴える。それならば最初から言えばいいはずですが。どうしてこんなことをするのか。二つの理由がある考えられます。

2) 苦しむために召されている

パウロがかつてどんな人であったのかを思い出してください。彼は生まれながらにローマ市民権をもつくらいですから、非常に裕福で社会的にも高い地位にある親のところに生まれ育ち、子供の時から英才教育を受け、留学し、パリサイ派のエリートコースを歩んできた人です。クリスチャンを迫害

していた時は、自分が捕まえて牢に投げ込んでいた。自分は外から牢の中でおびえて泣いているクリスチャンを冷たい視線で見ている。

それが今は逆の立場になりました。かつてひどいことをしてきた自分なのに、苦しむのはいやだからと言って権利をふりかざすことはできない。キリストの痛みを受ける者になろうとしている。パウロがすばらしいということではありません。彼はそのようにしなければならなかったとも言えるのです。というのは、イエスご自身がパウロにあらかじめ語っていたからです。9章16節。「彼（パウロ）がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」

苦しみながら宣教していく。イエスはそのような方法をとられました。

3) なぜ後になってから言うのか？

ではどうして後になってから、彼はこんなことを言うのでしょうか。37節。「彼らは、ローマ人である私たちを、取り調べもせず公衆の前でむち打ち、牢に入れてしまいました。それなのに今になって、ひそかに私たちを送り出そうとするのですか。とんでもない。彼ら自身が出向いて来て、私たちを連れ出すべきです。」

パウロは怒っているのか。そうではない。パウロなりの配慮です。二つの目的があります。一つは看守を守るため。看守は囚人であったパウロとシラスを命令なしで外に連れ出し、傷まで洗った。これは完全な命令違反です。あとで責任を問われる可能性があります。でもパウロが長官たちの弱みを握っていることを示したことで、看守の責任を追及できなくさせる。そのような配慮です。

そしてもう一つ。パウロを訴えた人たちに対する牽制です。長官の弱みを握っていることを示すことで、教会に対して批判的な人たちは動きづらくなる。パウロは自分を守るために権利を主張したのではない。看守と教会を守るためにした。そこに神の働きを見ることが出来ます。

3 牢につながれている者

1) 救われるために、何をしなければならぬか

きて、その看守の顔を見ていきましょう。この日、彼は当直にあたっていて部屋で仮眠していたときに大きな地震が起きます。目を覚まして牢を見に行くと、明かりがないので全部は見えないが扉が開いているのだけはわかった。しまった囚人は逃げてしまった。囚人を逃してしまえば看守は死

刑。それが当時のきまりでした。もう生きる望みはない。絶望して剣を抜き、死のうとします。気配を察知したパウロは大声で叫びます。「自害してはいけない。私たちはみなここにいる。」

このあと、看守は二人を牢の外に連れ出して、こう言います。30節。「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか。」

不思議なことに、この人は自分は救われなければならないと思っています。目の前で起きていることを見て、パニックになっていたのでしょうか。確かに混乱していたでしょう。でもそれだけでは罪の話は普通出て来ない。なにかもって決定的なことがあったはずで

2) 主イエスを信じなさい

看守は、パウロが鞭で打たれていたときからそばで見えていたと思われます。鞭が皮膚に食い込み血が流れても、パウロが静かに受け止めているのを知っている。牢につながれていても、文句ひとつ言うことがない。ただ静かに神を賛美し、祈る声が暗い牢の中から聞こえていました。これまで見てきた囚人とまったく違う。どうして違うのかは分からない。でもそのときはパウロと自分とはなんの関係もない。自分はただ命令を守るだけ。そう思っていた。

ところが、大きな地震が起きて扉が開き、鎖が解けても、パウロたちが逃げないで牢の中に留まっているのを見たとき、パウロたちが信じているきよい神がこの人たちのそばにおられるのが直感で分かった。きよい方の臨在に触れた者は、例外なく罪の自覚をせまられていきます。いったい誰が牢に投げ込まれていたのだろうか。看守は考え始めます。肉体的には、パウロとシラスが牢に投げ込まれた。でも霊的に見たら、自分こそ罪という牢獄に捕らえられ、そこで苦しみ続けている者ではなかったのか。自分はその牢獄から出る方法を知らない。しかし、この人たちはなにかを知っている。パウロはなぜ痛みを耐えていくのか。牢の中で静かに祈ることができるのか。この人たちは救われる方法を知っているに違いない。わらをもすがる思いで尋ねます。「先生方。救われるためには、何をしなければなりませんか。」

二人は答えます。31節。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。」主イエスがあなたの罪を贖うためになにをしてくださったのか、そのことを語った後、看守とその家の者全部が信じてバプテスマを受け、救われていきます。

3) 苦しみの中にイエス・キリストが働かれる

もし、パウロが占いの霊につかれた女に関わる事がなかったなら、鞭に打たれることもなく牢に投げ込まれることもなかったでしょう。それはそれで伝道が順調に進んだのかもしれない。しかし神の方法は別のところにありました。パウロたちが訴えられ、鞭に打たれ、牢に投げ込まれる。そうしたら、看守との家族が救われた。なぜ神はこのような方法をとられるのでしょうか。わからない、ということでしょうか。

いいえ、はっきりしています。鍵は、パウロがローマ市民権を主張しないで、あえて理不尽な苦しみを受けていった、というところにあります。パウロが文句も言わず、むしろ静かに苦しみを引き受けていったとき、神が働いてくださっていたのです。勘違いしてはいけません。パウロの信仰がすばらしいから看守が救われた、のではありません。パウロは最初からイエス・キリストの名のために苦しむ、そうやって人々に福音を伝えるのだと言われていた。パウロは、言われたことをしたに過ぎません。

パウロは理不尽に思えるような苦しみを味わいました。なぜ、できたと思いますか。パウロひとりが苦しんでいたのではない。パウロとともに主イエス・キリストが苦しんでおられる。なぜ知っているか。かつてクリスチャンを迫害していたときに、主ご自身が言われたのです。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」これがパウロの原点です。

苦しむことに意味があったのか。ありました。看守は、それを見て人生を百八十度変えられていく。苦しみというのは、それほどの力をもっている。

牢につながれても、鞭で打たれた傷がどんなに痛かったとしても、足に鎖が繋がれていたとしても、私たちは何も絶望する必要がない。私たちはもはや罪という牢獄には繋がれていない。罪から解放されていることを、いつでも喜ぶことができる。そのような恵みを与えてくださる主の御名をあがめます。